

アジアを 読む

13

タイ南部のイスラム - 「人境」と「国境」の矛盾

大きな事件や出来事の影に隠れて目立たないが、何となく気になる地域がある。それはタイ南部である。

今年1月にタイ国軍基地が襲撃されて4人の兵士が死亡、大量の武器が強奪されたのに続き、3月下旬には爆弾により30人以上が重軽傷を負った。さらに4月末に警察官事務所など10カ所への襲撃事件が起き、治安部隊に多数が射殺された。イスラム過激派の犯行とみられるこれらの事件はマレーシアに近いタイ南東部で起きた。一帯に敷かれている戒厳令の網の目を縫って一連の事件が発生した。

平和なイメージが強いタイで戒厳令が施行されている地域があるのも驚きだが、爆弾事件や大規模な連続襲撃事

件にまで犯行がエスカレートしたのに衝撃を受けた。

この地域にひかれるのには理由がある。以前にマレーシア北東部からタイ南東部を取材し、仏教寺院とモスクが併存している光景に感銘を受けたからだ。

マレーシアの最北東部はクランタン州である。メッカのベランタと呼ばれるように、イスラム教徒が大多数を占め、昔ながらのマレー文化が色濃く残る。政治面でもイスラム国家の樹立を目指す野党の全マレーシア・イスラム党(PAS)の力が強い。PASは3月の選挙で与党連合に敗退しクランタン州政権を手放したが、ほぼ14年間、州議会で絶対多数を維持した。

スーパールのレジ台は男女別、ホテルで

のアルコール類販売、歌やダンスも禁止。州政権を握っていたPASは時計の針を戻すような政策を次から次へと打ち出し、政教分離を旗印とするマレーシア連邦政府をいらだたせた。

そのクランタン州の先がタイ領、国境を渡っても風景はマレーシアそのもの。住民もマレー系、言語もマレー語、メッカ巡礼を果たした人が着用するハジ帽、それに少数だが赤黄色っぽい僧衣をまとった仏僧の姿が記憶に残っている。

タイのイスラム教徒は全人口の4%にすぎないが、そのほとんどは南部に集中する。南部4県の80%がイスラム教徒といわれる。アジア通貨危機後のチュアン内閣時に外相を務め、飾らない人柄で人気を集めたスリン・ピット氏はイスラム教徒として有名だった。同氏の米ハーバード大学での学位論文は「タイ南部のイスラム教徒の研究」というタイトルだ。たはすである。

なぜ、タイ南部にイスラム教徒が多いのか。もともとタイ南部はサルタン・イスラム圏の君主の版図だった。しかし、強大なタイのアユタヤ、シャム王朝の圧力を受け、マレー半島北東部のクランタン、トレンガヌ、ソクラ、パタンなどのイスラム都市国家は事実上、タイへの朝貢を余儀なくされていた。もちろん、タイによる支配に反発、離脱を旨とするイスラム朝

貢国の反乱も数多く起きた。

その後、英国のマレー半島への進出により、タイは独立を維持するためにマレー北部の宗主権を放棄。マレー北部は英植民地主義の支配下に入った。問題はその時の英領とタイとの国境線の画定にあり、クランタン、トレンガヌは英領マレーに組み込まれ、パタンは仏教国タイに属することになった。イスラム圏が当時の国際情勢により、二つの国家の版図へと分断されてしまった。

タイ領となった当時のパタンが現在のパタン県、ヤラー県、ナラティワート県である。イスラム過激派による一連の事件の主要舞台である。1950年代から70年代にかけてこれらの地域では、タイ化に抵抗し、自治や分離を求めるイスラム組織が多くの武力衝突事件を起こした。

その後のタイ政府の柔軟路線などにより、イスラム組織による分離運動は下火になったが、テロとの戦いが始まって以降、イスラム過激派の動きがにわかに活発化してきた。国際テロ組織アルカイダの存在もちらつくようだが、問題は、人(文化)境」と「国境」の矛盾から派生している。タイ南部の歴史をひもとくと、タイを仏教国として単純に受け止めるのは誤りである。

(日経香港社 奥村幸広)